

すずかも通信 52

行徳野鳥観察舎友の会会報 1988年10月1日発行

特集

バンディング



市川 拓 画



大関みき江画

バンディング（鳥類標識調査）

バンディング（鳥類標識調査）って、何でしょう。時々耳にすることばですが、どんなものか正確にご存じの方は少ないと思います。

秋は鳥の渡りの季節、そしてバンディングの最盛期。現在の日本のバンディングが再スタートした頃、基礎を築いた一人だった蓮尾嘉彪さんがその意義について、保護区で熱心にバンディングを続け、現在アラスカ大学に留学中の松本護さんが解説と見出しを、また安易な考え方に警鐘を鳴らす立場で笹川けい子さんが、それぞれ書いてくださいました。



鳥島のアホウドリが、とうとう84つがいも産卵したということです。数百万羽もいたものが乱獲され、一時は絶滅したとされていました。その後も長いこと10つがい前後の繁殖しか見られなかったものが、どうやら最悪の状態をまぬがれて増加してきたようで、とてもうれしいことだと思います。

これは、アホウドリの保護と研究にうちこんでおられる東邦大学の長谷川博先生のご努力、特に巣づくりの場所への八丈ススキの移植などの効果が大きいのですが、その基礎にあったのがバンディングだったことは、案外ご存じない方が多いのではないのでしょうか。

長谷川先生は、1976年の調査開始以来、発見されたすべてのアホウドリのヒナに標識の足環をつけておられます。

通し番号の入った金属のリングと、遠くからでも読めるような大きな数字を入れた、年ごとに違う色のプラスチックリングです。これによって一羽一羽のアホウドリが見分けられる名札のようなものです。アホウドリにとっては腕時計くらいの重さにあたります（スズメやツバメでは皮靴くらい）。生まれてから何年くらい島を離れているか、どのあたりまで移動するか、何才から、また何年ごとに卵を産むか、寿命は、死亡率は、そして個体数は実際にはどのくらいか、アホウドリの保護に直接につながるこうしたことがらは、一羽一羽の鳥が他と区別できて初めてわかるものなのです。また、足環をつける時にヒナの栄養状態や健康についてもチェックすることができます。



野生の鳥を調べる時、バンディングは欠かせない方法の一つです。たとえばツバメが毎年同じ巣に帰ってくると言っても、同じ鳥かどうか、よほど変わった特徴がなければ見分けられないでしょう。標識を使わないで見分けた例では、イギリスのスリムビレッジでのコハクチョウをくちばしの模様で記録し、繁殖地であるソ連でも発見することができたというものがありますが、これは誰にでもできる方法ではありません。

たとえば日本で巣を作るチュウサギが主にフィリピンで冬をすごしていることとか、オーストラリアで冬をこすオオジギは、日本以外での繁殖が知られておらず、両国間での保護が必要だというような、バンディングによってわかった事実はいちいち挙げきれません。

現在、バンディングはほとんどボランティアの手で行なわれ、数や回収率などは欧米諸国とは比較にならないほど低いものです。良識と鳥についての正確な知識、そして愛情のある人なら、どなたでも所定の講習（泊まりがけです）を受けた上、免許を得ることができます。ただし、相当にきつい作業である上、責任も重い仕事です。

もう20年以上も前のこと、行徳で行なわれた千鳥獵（シギ・チドリ類のバンディング）で、手にしたキョウジョシギにアメリカの足環がついていた時の感動を忘れることはできません。両手の中にすっぽり収まってしまふこの小さな生きものが、自分の力で、はるばると海を越えて渡ってきたのです。“地球は一つ”という真実を教えてくれた鳥たちと、小さなリングに感謝した瞬間でした。

バンディング

松木 護

バンディング（鳥類標識調査）とは、何らかの方法で鳥を無傷のまま捕らえ、数字の刻まれた足輪（リング）を装着して放鳥するという作業のことだ。日本では現在、環境庁からの委託で山階鳥類研究所標識研究室が、バンダーの養成から記録の整理・保管まで一括して行なっている。

保護区は環境庁の指定する新浜一級鳥類観測ステーションの一部に含まれていて、1975年に本土で繁殖するシロチドリ・コアジサシに標識が行われ、その後、本土が葦でおおわれた後、1979年よりカスミ網を使用しての小鳥類のバンディングが始められた。

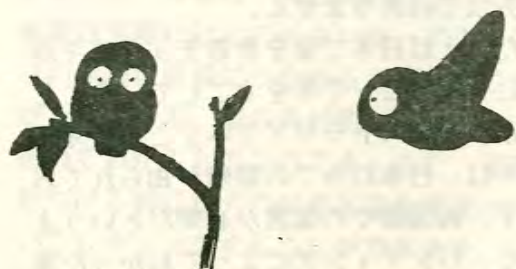
1980年10月からは当時、大人から「新浜悪ガキ連」と称された観察舎常連の中高校生5人組が蓮尾夫妻と百瀬邦和氏の指導の元に熱心にバンディングに取り組むようになり、その後1983年4月まで、主にカスミ網を使用して、7月中旬～8月中旬には本土葦原にネグラをとるツバメ、スズメ、オオヨシキリ等、9月～11月初旬は渡り途中の小鳥類、そして11月～4月中旬は本土アシ原で越冬する小鳥類の捕獲標識を目的にバンディングを行なった。

このころは毎年ほぼ同じ場所に網場が設けられ、8月～翌年4月までカスミ網は網場から撤収されることがなく毎週土・日曜に網がひろげられ、その他の日には網がたばねられて鳥がかからないようになっていた。



この他、観察舎前の水路のエサ場にトラップを設置してエサを食べに来るキジバト・カルガモ等を捕獲したり、同じくエサ場で無双網を使用してゴイサギ・アオサギ・セグロカモメを捕獲した。8月には北池にカスミ網を張り、シギ・チドリの標識も行った。また観察舎開館当時から今日まで、野鳥病院で手当を受け元氣になって放鳥された鳥にリングがつけられている。このようにして保護区でこれまでに標識・放鳥された鳥は約100種5000羽にもものぼっている。

バンディングによって保護区を利用する鳥の状況がそれ以前より少し詳しくわかるようになった。それまでは秋にごくたまに観察されていただけのノゴマやキビタキが渡り途中にアシ原に意外に多く立ち寄っていることがわかった。これまで保護区で記録された鳥のうち、シマクイナ等、バンディングでの記録のみで目視観察例がまだないものもある。ヨタカをはじめアオバズク、オオコノハズク、トラフズク等、ふだんは見る機会の少ない夜の鳥も渡り途中に網にかかったり、夜の見まわりの際に観察されるようになった。また、旅鳥や冬鳥のバンディングによる初認はたいいてい目視観察による初認より1～2週間早く、終認は1か月以上も遅いことがあるのもわかった。



バンディングの思い出

松木 護

今は昔、

僕が女性の後ろ姿を

横目ながらに追う様なことは

全くしなかったころ……

バンディングシーズン中、土曜はいつも学校がひけると家に直行し昼食もそこそこに観察舎へと向かった。とはいっても家から電車を乗り継いで片道2時間半はかかり観察舎へ着くのはどんなに早くても3時すぎだった。

たいいていは僕が着く前に地元の悪ガキ連のだれかがすでに網をひろげてバンディングを始めていたのだが、そうでない時は自分で網をひろげに行った。網をひろげるのはキライではなかった。その日の風の具合や鳥の動きにあわせて網の高さや張り具合を工夫するのは獵師がワナをしかけたり、獲物をまちぶせたりするのに似た自然とのかけひきのようなものだと思っていた。また10月は渡りの季節なので、ふだんはお目にかかれない鳥が網にかかるのではないかと期待しながら次々と網をひろげていくのは楽しくもあった。

(D) 画

いったん網をひいたら、約2時間に一度の割合で網場の見まわりに行った。あまりひんぱんに網場をうろつくと鳥がかかりにくくなる。かといって、あまり間隔をあけすぎると網にかかった鳥が弱ってしまう。見まわりに行くタイミングがしっかり身につくまでにしばらくかかった。

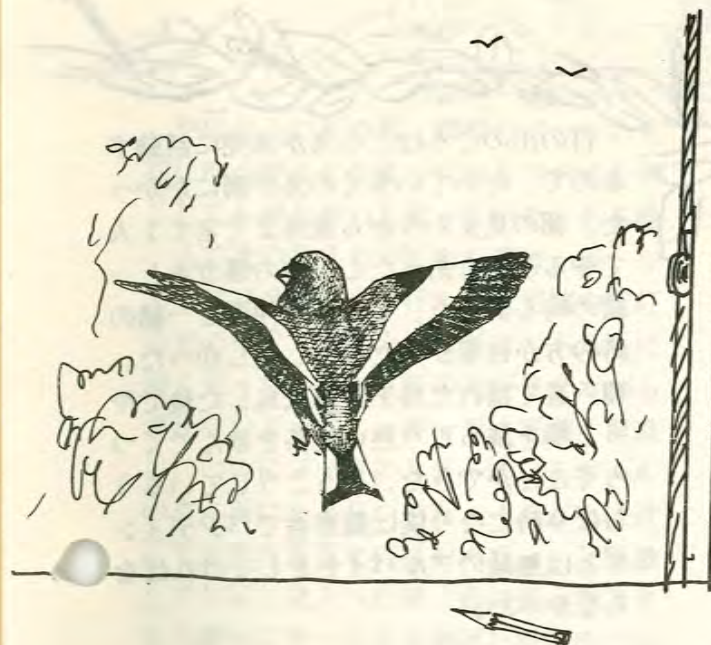
雨が降りだすと何はともあれ網場へ走った。雨にぬれて網にかかった鳥が弱る前に網からはずし、またそれ以上鳥がかからないように網をたたまなければならなかったからだ。こんな時にはずぶぬれになった鳥をはずそうと気ばかりあせってしまい、指を網にからめて半分泣き出しそうになりながら「早くはずれてくれー。」と困った時だけの神だのみをくり返したものだ。

僕らはいつも日没の1時間位前と1時間位後に一度ずつ見まわりに行った。この時間帯は鳥がよく動きまわるのでよく網にかかった。網場に近づいて網に鳥がかかっているのが見えると心ウキウキ胸ドキドキ。網の中に赤いノドのあざやかなノゴマの雄成鳥や黄・白・黒をあでやかにきこなしたキビタキの雄成鳥が見えればなおさらのこと、もうルンルン気分が鳥を網からはずしていった。

網からはずす、と言ってしまえば簡単だが実際は大違い。とにかく早くかつ安全に鳥を網からはずさなければならなかった。たいていは鳥の両足をそろえてもち、網からひきはなすようにひっぱりとすぐに網からはずれてくれた。しかし時には、くちばしと尾羽の一部をのぞいて体がぐるぐるまきになった網におおわれてしまっていることがあって、そんな時はさきほどまでのルンルン気分はどこへやら、網と格闘したものだった。



特に日没後の見まわりでは、ヘッドランプや大型の懐中電灯で照らしても手元がよく見えず気ばかりあせってしまった時には5分や10分たってもいっこうに鳥がはずれる気配がなくてしかたなく鳥の首をしめないうち注意しながら網の一部を歯でかみ切って鳥をはずしたこともあった。いつだったか、日没後の見まわりでモズが網にひどくからまっていたことがあった。一刻も早く網からはずしてやろうという僕の気持をモズが知るよしもなく、そいつは僕の人さし指に何度もくいついた。傷はしだいに大きく深くなり、ついには血がにじみだした。指の傷はもうなおってあとかたもないけれど、あの時のモズの心の傷はもういえたのだろうか？



鳥を網からはずすと一羽ずつ鳥袋と呼ばれるもめんの袋に入れた。鳥袋の口についているひもをひきしめて口が開かないように結んでから、いつも鳥袋を首にかけた。人はころんだ時に、自然とひざや手をついて、体と頭が地面にぶつからないようにするので、鳥袋を首からかけておけば、あやまっころんでも、鳥をつぶしてしまう可能性が少なくなるからだ。

さて、見まわりから帰ると当時は「研究室」と呼んでいた旧館の2階でリング付けと測定をした。せっかく捕れた鳥なので少しでも多くのデータを残そうとずい分と長いこと鳥をいじくりまわして各部の測定をしたものだった。



市川 拓 画

外が明るい時は標識・測定した鳥をすぐ放鳥した。鳥をつかんだ手を2階の窓からさしだしてそっと開くと、たいていの鳥はバタバタと後も振り返らずに飛び去った。中には手の平の上でしばらくあたりを見まわしたり羽づくろいをしてから飛び去るものもいた。

鳥が一羽また一羽と飛んでいくのを見て、心の重荷が一つまた一つとおりていくような気がした。しかしごくまれに、不幸なことに手からボトリと5m下の地面に落下した鳥もいた。あわてて階段をかけおりてその鳥をさがしに行き、傷ついた鳥を手により、重い足どりで2階へ上がっていった。

日没後に捕れた鳥は1羽ずつ鳥袋に入れて寝かしつけた。鳥袋を暗い箱の中等に静かにおくと、それまで袋の中で騒いでいた鳥が不思議と静まりかえった。安心して眠ってしまったのだろうか、それとも暗がりが出て黙ってしまったのだろうか？

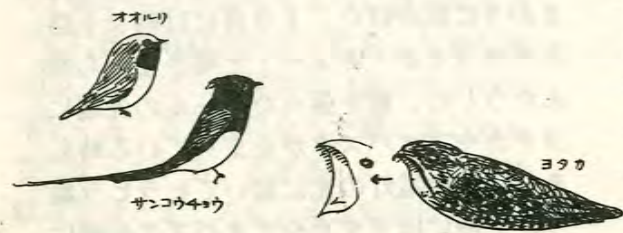
鳥を寝かしつけた後で下へおりていって、毎回蓮尾家で夕食をごちそうになった。自然保護のことで議論を戦わせたり鳥や自然について楽しく語りあったりした。僕ら悪ガキ連にとっては大切な時間だった。

夜10時半か11時ごろには最後の見まわりに出かけた。10月には時々上空をササゴイが「キュー」と鳴きながら飛んだりした。網を張ったボールの先端にヨタカやアオバズクが止まっている時もあり、懐中電灯の光に驚いてヒラヒラ舞った。時にはヨタカやアオバズクが網にかかったりもした。

ヨタカがいよいよといまいと、夜の見まわりはイヤだった。「この世におぼけなんていないんだッ。」といくら自分にいい聞かせても、ついつい早足になってしまった。早足で網場をかけぬけた後で、自責の念にかられて逆戻りして一枚一枚網をていねいに見てまわったことが一度ならずともあった。

見まわりから帰ってくると11時すぎ調査日誌を書いて最終的に寝床につくのはたいてい12時をまわってからだった夜、外で何か物音がするとすぐ目が覚めた。また雨がトタン屋根を打つ音がしたような気がして何度も目が覚めることがあった。

翌朝、日の出の少し前に起きてねぼけまなこをこすりつつ、服をひっかけて2階へ上がっていった。外が明るくなったところで、前の晩に捕れた鳥を放鳥し、空になった鳥袋を首にかけて見まわりにでかけた。他の人が寝ている間に朝一番の見まわりに出かけるのは気分がよかった。昔、水門があった所から丸浜川の上流を見ると天気の良い朝にはきまってもやが川面のすぐ上に漂っていた。この風景は今でも何故か鮮明に思い出すことができる。



日の出のころは、小鳥が活発に活動するので、たいてい多くの鳥が網にかかった。朝の見まわりから放鳥まで全て1人でやることもあったし、他の悪ガキと一緒にの時もあった。もちろん仲間と一緒にの時の方が仕事が楽だったし楽しかった。朝一番で捕れた鳥を無事放鳥した後でやっと顔を洗ったり熱い紅茶を飲んでくつろぐことができた。そうこうしているうちに9時になり僕は観察舎でバンディングとは無縁のアルバイトをしなければならなかった。

5時に仕事が終わると他の悪ガキ連の面々に合流し、日没後の見まわりをして網をたたんだ。網をたたむと「どっ」と疲れが出た。あの解放感は何だったのだろう？その時とれた鳥の標識・測定後に寝かしつけて、翌朝に放鳥してくれるよう蓮尾さんに頼んでから家路についた。

こうして家にたどり着くのは早くても10時、遅い時は1時近くになることもあった。そして、物も言わずにベッドにもぐり込み、雨が降ろうが地震が起ころうが、翌朝までいつもぐっすり眠り通した。

バンディングを通して出会った鳥の中には5年以上たった今でもはっきりと覚えているものがある。1980年10月に標識されたアリスイが2年後に再び捕れた。僕は感激だったが当のアリスイにとってはさぞかし迷惑な再会だったことだろう。

やはりこの年の秋、網場のボールの先端にゆうゆうととまっているヨタカを何としても捕りたいと思っていた。ある晩一人で夜の見まわりに出た僕は、ボールの上にヨタカを見つけた。大型懐中電灯の光の中で大きな赤い目が2つ不気味に鈍く光った。懐中電灯の光がヨタカからずれないように、一步一步注意深く前進し、ついにヨタカのとまっているボールの真ん前にたどりついた。「こんなに近くでヨタカを見たのは初めて。」と感激してしばし見入った後、我に返ってヨタカの脚元にそっと手を伸ばした。やつは不動のままだ！だめでもともと、と覚悟を決めてす早く手首をひねって脚につかみかかった。その後どうなったのかは正確に覚えていない。ただ、しばらくして両手の中で必死にもがくヨタカを凝視している自分に気づいた。

いくら鳥が好きでもモズにかまれるのに我慢ならなくなった悪ガキ達は、いつの頃からか測定中に紙テープを細く切ってくちばしに巻くようになった。1981年10月のある日、測定の終わったモズをつかんだ手を窓の外で開いた瞬間、くちばしに紙テープがチラッと見えた。あわてて手をにぎりしめたがーあとのまつり。モズは声もなく飛び去った。丸浜川の対岸におりたところを望遠鏡で見ると確かにくちばしには紙テープが巻きついていて、自分の不注意さをのろってみたところで気安めにもならなかった。それから1ヶ月以上たったある日、このモズが再捕されたと聞いた時は胸の大きなつかえがやっとなれた気がした。

1982年10月のある朝、スズメより大きい褐色の鳥が1羽網にかかった。近づいてみると褐色の地に黒い縞が見えた。「アリスイかな？」と手を伸ばすと鳥がもがいた。脚が異常に大きく脚ゆびが長い。太く短いくちばしも目についたまさかと思って翼を広げると……白い！確かに次列風切が白い。間違いなくシマクイナだ。「めったに見ることのできない鳥が今、目の前で網にかかっている。」大きな興奮が一瞬体の中を走った。指がふるえていつまでたっても鳥が網からはずれなかった。



1980年10月5日、僕がバンディングを手伝うようになってまだ間もないころのこと、シジュウカラが1羽捕れた行徳付近ではシジュウカラは珍しい。他の場所では見慣れているシジュウカラが何故か珍鳥のように思えた。ひと通り測定が終わって最後に体重を測ろうとした時のこと、緊張でこわばった僕の手からシジュウカラがスリとぬけ出し、一直線に窓に向かって飛んだ。「カツン」と軽い音がして鳥は窓ガラスからはね返った。小さな弧を描いて鳥は舞い、音もなく窓際のカウンターのの上に落ちた。かけ寄ってみると鳥は仰向けにひっくりかえり、体全体で荒く息をしていた。そして……突然ブルブルと大きく体中をふるわせて、静止した。まるでぜんまいのきれた時計のように。我に返っておそろおそろ手にとって見ると口から血がにじみ出ていた。

あのシジュウカラのことは決して忘れない。

刻印

笹川けい子

葦の茎の上で、ツバメのスウは目を覚めました。いい朝だ。濡れたように黒光りする自慢の翼を思い切り伸ばして伸びをする。巣立ちしてもう2ヶ月近くがたった。親鳥と離れ、こうして若い仲間達と過ごすのにももうすっかり慣れた。

それにしても今日はわけもなくワクワクする。体の奥底から熱い力がみなぎってくる。そうだ。「旅立ち」の 때가近づいているのだ。

スウと同じ葦原で目を覚ましたツバメの若鳥達は、黙って空を見上げている年寄ツバメの様子をそっと伺った。「あと2、3日じゃろう。腹一杯食っておくんだな……。」その言葉を合図に、若鳥達はいっせいに空に舞い上がった。

お気に入りの小さな池のそばでスウはひとしきりエサを捕った。風が吹くと水面の葦がサワサワと優しい音をたてる。いい気持ちになったスウは胸を張り翼をいっぱい広げて、池の水面ぎりぎりを滑空してみせた。そのまま、小高く土を盛り上げた池の土手を風に体を乗せてふわっと上昇する。

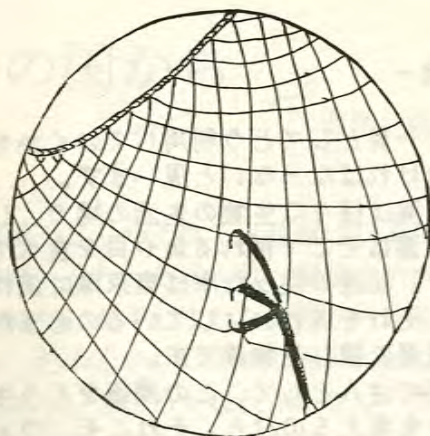
と、不意に、体の自由がきかなくなった。一体どうしたって……。無我夢中で右の翼を伸ばそうと体をよじった途端、急にガクンと頭が下がり、体がゆらりと大きく揺れた。網にかかったのだ……。しばらくじっとしていると、今度は急に恐怖がこみあげてきて、スウは力を振り絞り何とか網から逃れようともがいた。「おい、若い、あまり騒がん方がいいぜ。」すぐそばでしわがれた声があった。なんとか首をよじって声のするほうを見ると、一羽のオオヨシキリが同じように網にぶらさがっているのが目に入った。



「なあに、1、2時間の辛抱だ。」返事をしようとしたがくちばしが思うように動かない。そのうちにだんだん気が遠くなってきた。

どのくらいいたただろう。グッと体を握まれてスウは我に返った。人間に握られているのだ。毛がなくつつつとしていて、まるでへびのようだ。そのくせ妙にじっとりと冷たく、ぞっとするような感触だった。これが最後のチャンスとばかりに暴れたが、前よりも強い力で握られると、真っ暗な袋の中に押しこまれてしまった。もう、おしまいだ。一目でいいから、一度でいいから、この目で南の国を見、この翼で南の国の空を飛びたかった。緑濃い密林、大きくて美しい花々……。かあさんが子守歌がわりに聞かせてくれた南の国の風景が胸をよぎる。

それからのスウはもう抵抗しなかった。何度となく人間に体を握られ、翼を広げられたり、尾羽を広げられたり……。不気味に光る鉛色の輪を足にはめられた時でさえ、その瞳は宙をぼんやりと見つめているだけだった。だから、不意に体が自由になって窓から外へさしだされた時には、何がどうなったのかまるでわからなかった。まだ頭も体もまひしたようにしびれたままだったが、ただスウの中で本能的な何かが「飛べ」といった。翼を広げスウはよたよたとぶざまな格好で空へ飛び出した。



その日の夕暮れ、スウは皆よりも早めにネグラの葦原へ戻った。片足の違和感はどうにもならない。泣きたいようなはじめな気持ちで葦の茎に体をあずけていると、こちらの方をじっと見ている年寄ツバメの視線に気づいた。「なあに、じきに慣れるさ。」そういうと年寄ツバメは目をそむけた。——早ければ、明日の朝には旅立ちが始まる。長い旅だ。毎年きまって何羽かの落伍者がでる。あの「刻印」のせいってわけでもないだろうが、あいつにとっちゃあ厳しい旅になるだろう……。



☆特集「バンディング」、いかがでしたか？野鳥を捕獲することは確かに危険で鳥にとっては迷惑千万です。安易な考えは許されません。一方、現在ではよりよい鳥の個体識別方法が見つからず、またバンディングで得られた知識が鳥の保護に役立っていることも確かな事実です。ご意見、ご感想をお寄せください。

鳥に足輪をつけることで、個体識別をするという方法は、約50年前、J・P・バーキットというイギリス人によって始められました。バーキットはただ自分の家の庭に来るロビンにそれぞれ違った形のリングをつけただけで、それによりテリトリー行動などを観察したのですがそのやりかたが鳥類研究に一大革命を起こすとは思ってもみなかったのです。非常に信心深いキリスト教徒で、「ロビンにリングをつけるたびに、神が造りたもうたものに、神ご自身よりも興味を持つことが許されるのかと、良心に痛みを感じたものでした。」と手紙に書いています。

バンディングの賛否を論ずるつもりはありません。ただ、それが人間本位の研究心や興味を満足させるためだけのものであったり、ただ単に狩猟本能を満たすためだけのものにならぬよう、常に自問を繰り返すことを忘れてはならないと思います。

戦後、日本でバンディング調査が発展したのは、進駐軍のバック・アップのおかげだそうです。何のために、軍が鳥を？保護のためでしょうか？いえいえとんでもない。鳥を兵器として利用するためだったのです。と聞いてヒッチコックの「鳥」という映画を思い出される方もいることでしょう。しかし、現実にはもっと現実でもっと効果の高いやり方、つまり細菌兵器の運搬役として鳥を利用しようとしたのです。それが実際に使われたのかどうかは定かではありません。罪もない鳥達がそんな恐ろしいことに利用されることがないように祈るだけです。

はあと

近頃、ウォーターフロントという言葉をよく耳にします。WATERFRONT、川・湖・海に接した土地、という意味なのですが、横文字に弱い我々日本人はついつい何となく夢のあるバラ色のイメージを抱きがちのような気がするのですがどうでしょうか？

ところが先日、TVでウォーターフロントの開発と称して東京湾横断道路の話が取り上げられていたのには驚きました。ウォーターフロントの開発と言うと聞こえがいいものの、その実体は20年前と同じ無秩序で人間本位の東京湾開発計画だということでは考えものです。

また、理想的なウォーターフロントはマリナリケーションの拠点であればよいというのもおかしな考えだと思います。広大な浅瀬を埋め立て、その埋め立て地の端に少しばかりの人工海浜を作り、はい、これで出来上がり、といったところで、失われた浅瀬の浄化能力、生産力は補われるべくもありません。海は汚れる一方で、何年か後には必ずつけが回ってきます。

では、理想的なウォーターフロントとはなんでしょう？あらゆる角度から海や、水辺の土地を見つめなおし、自然の動きを考慮に入れた上で、しかもあくまでも

東 良一

自然の一員としてどう利用していくかを考えなければならないと思います。

東京湾は様々な生物の生活の場で、しかも私達はそこで捕れる魚や貝を食べています。私達の使った水は東京湾に流れこみ、それをきれいにしているのもまたその浅瀬に棲む生物達です。

水辺の住人として、この環境をどう生かすかを考えるのなら、それこそ、ウォーターフロントを、あらゆる角度から論じ尽くす(cover the waterfront)が必要でしょう。



トミタ・イチロー画

グリーン・丸浜川

7月30日(土) ごほうこく

夏の暑い昼が過ぎ、さわやかな夕暮れのひとときを、涼風に吹かれながらバーベキューに舌つづみをうつ……はずでありました。しかし、今年は自然のクーラーがききすぎていた様子。異常気象だか何だか分からないけれど、寒いったらない。しまいには、バーベキューの火に手をかざし、熱いアップルティーをすすりながら花火を見る始末。来年はもう少し夏らしくなってもいいという感じです。

(清水大悟)

鳥の国から

蓮尾 純子

台風18号がそれて、今朝はひさびさの快晴。それとばかり、観察舎のベランダにパンを干しました。段ボール箱に25、たぶん200キロくらいにはなるでしょう。ところが暮れがたになって空一面の黒雲、ばらばらと落ちる雨粒。これは一種の残酷ものがたりではないか。とりこんだ箱の重さ。

こんな重い思いをして大事に大事にとっておいた餌用のパンを、とうとう1トン以上も廃棄しました。福栄中と南新浜小で毎週とっておいてくださる給食の残りに加え、鳥さんの餌にと多くの方々がくださった善意のかたまりのようなパンです。まちがってもだめにしなくなかったのに、長雨プラス“パン虫(調べたところ、ノコギリヒラタムシという乾物類の大害虫だそうで、2ミリくらいの小さな甲虫です)”の大発生。暗くなるとそろそろ、ではなく、しわしわしわという感じで床中にはい出してきて、階下のわが家にばらばらふってくるのです。やむを得ずあきらめました。120箱以上の7ビツキパンと100万匹以上のパン虫をらせん階段からえっさえっさと運びおろし、リヤカーで何度も往復して、肥料がわりに保護区の草原のあちこちにまきました。来年は、セイタカアワダチソウの育ちがよいのでは？ぎっくり腰のおまけまでついて、何ともはや、聞くも涙、語るも涙のお話。

おもったよりゴミが多く大変だった。でも、きれいになったのでよかったと思う。(T)

カモが毎日のようにふえてきました。8月中旬ごろからサギが数多く見られ、ひさびさにダイサギ・コサギが100羽をこえ、ゴイサギは340羽以上になりました。ご猟場の繁殖も少し多かったです。お台場にあったサギのコロニーが消えたそうで、こちらに戻ったものがあるのかも知れません。

楽しみにしている小鳥の渡りはあまり目につきません。“渡り”というからには、鳥の群れがまとまって、南をさして飛んで行く姿を想像される方が多いと思いますが、実際には、鳥たちは地上から目で見えるような高さで飛ぶことは少ないのだそうです。やむをえず逆風について飛ぶ時などに目につく程度で、おまけに日中は餌をとり、外敵を避けて夜間に渡る鳥が多いとのこと。昼渡るヒヨドリなどの群れを別にすれば、これは渡りの途中だな、とわかるような鳥の飛ぶ姿を見たことは数えるほどしかありません。それでも、前の日にはいなかったカモの小群が朝の光をあびて羽づくろいをしていているところを見つけては、前夜の出発地は下北かな、それともカラフトあたりかな、などと想像しています。

皆様楽しまれたようですが、私は行けなかったのです。午前中、お子様方と野菜を洗い、お昼を食べて、そこまででした。私の手できれいにした野菜なのに、口には入らないと思うと、口惜しいというか、うらめしいというか。でも、その日の夕食はバイキングの焼肉屋さんで、似たようなものでしたが。(三浦典子)

水車ニュース



「うそみたい。見てよ、これ」

有さんがさし出した手の平には、小さなザリガニがいました。8月1日、丸浜川の底生動物調査で、測点6（観察舎の駐車場脇の水門のところ）の泥をふるっている最中のことです。

ザリガニなんて珍しくもない、なんて思わないでください。ほかならぬ、このものすごいどぶ川のことなのです。わずか2年前には、全部の測点を合わせてさえイトミミズ1ぴき見つからないことがあったこのどぶ川で、ついに、何と、ザリガニがとれたのです。

ザリガニは、9月の調査でも水車“せせらぎ1号”付近の測点3から発見されました。どちらもたった1ぴきでしたが2年前の7月、無生物状態だった測点3から初めて1ぴきの赤虫が見つかり、大喜びした時のことを思うと、まるで夢みたいです。

丸浜川に小魚が帰ることも、もう夢でもまぼろしでもない現実になりました。ここ1、2か月というものの、気をつけて見るとかならずカダヤシが見られます。餌場の前では、10尾くらいの群れがたいていいくつか泳いでいます。

それにカニさん。長雨のためもあるのですが、観察舎付近の道路でカニを見えるというのは、10年来初めての経験です。クロベンケイガニが普通に見られるほか、保護区の入り口に近い水門の上（せせらぎ2・3号のところ）でアカテガニの脱皮殻を拾いました。

52-14

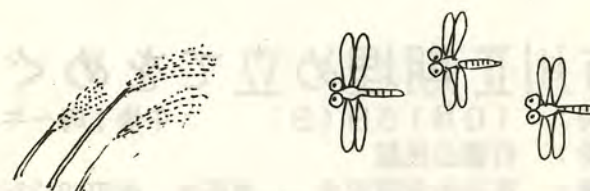
何が原因であるにせよ、丸浜川はもう死んだどぶ川ではなくなりました。濁った水面を飛ぶギンヤンマやシオカラトンボ、泳ぐアメンボやカダヤシ。わずか3台の水車がこれほど大きな変化をもたらしたとは信じがたいのですが、水車による酸素の供給が大きな原因の一つであることは、まちがいないのではないかと思います。私たちは、本当にものすごいことをやったのかも知れません。いつか、遠くない将来、メダカやザリガニやオタマジャクシが平気な顔で泳ぐようになったらと思うと、ときどきしませんか。

新池（いいかげんに名前をつけないといけませんが）はきれいですよ。水はまあまあという程度ですが、緑におおわれ、水鳥がいつもいっぱいいて、足もとからカエルやカメが逃げて、いい感じですよ。今、下池でカイツブリが卵を4つ抱いています。人が近付くと、さっと卵に巣材をかけて隠してから、自分もひっそり水にもぐって逃げます。サイフォンによる排水路のところには、ウラギク湿地から遠征してきたクロベンケイガニがやたらにたくさんいます。

ただし、頭が痛いのは、アシのコントロール。放っておけば、来年は水面もほとんど見えないほど、アシがしげってしまふことは確実。背丈以上にものびた土手の草刈りは、お盆休み返上の田上昇さんのおかげで1回は終わりましたが、もうひざ上まで草がのびました。水の中はまだほとんど手つかず。

まあ、しこしこ、ぼちぼち、やって行くほかないようです。夢に向かって前進するので、楽しいはずですね。がんばらなくっちゃ。

行事案内



☆定例新浜観察会（毎月第2日曜日）

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

集合：東西線行徳駅前 午前10時

10月9日、11月13日

解散：行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当：東 良一 共催：日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会
持物：昼食、飲み物、バス代（大人290円、子供150円）

地味な装いのカモ達が生北の国からやってきました。水面に群れるエクリプスのカモなどを観察しながら江戸川土手を歩きます。河口付近で昼食後、バスで保護区へ。快い秋の一日をのんびりとお過ごし下さい。小雨決行です。

☆定例園内観察会（毎月第1・3日曜日）10月2日・16日、11月6日・20日

集合：行徳野鳥観察舎前 午後1時半

解散： 午後3時半頃

担当：観察舎 蓮尾、協賛 友の会

保護区の水面がカモ達の姿で賑わう季節になりました。オスもまだメスと同じような茶色っぽい羽色をしていますが、日増しに美しい姿に変わっていきます。そんなカモなどを観察しながら保護区の中をひとまわります。雨天中止。

☆夕暮れ観察会（今回は土曜日です）10月22日（土）、11月26日（土）

集合：行徳野鳥観察舎 午後4時（日が短いので1時間早くしました）

解散： 午後6時頃

担当：観察舎 蓮尾

夕暮れ時、ネグラへ向かう鳥達を観察しながら保護区を歩きます。保護区の広い空いっぱいに広がる秋の夕焼け、その空をカモやサギが行き交います。日が落ちるとぐっと冷え込みますので身仕度をしっかりとっておいで下さい。雨天中止。

☆丸浜バードリバーを調べよう 10月10日（体育の日）、11月6日（日）

集合：行徳野鳥観察舎 午前10時

解散： 午後3時頃

担当：東 良一

持物：長ぐつ、タオル、ビニール手袋

10月31日に本研究の研究期間が終了、「よみがえれ新浜」水質浄化と水鳥誘致実験はいよいよ大詰に入ります。丸浜川は確実に息を吹き返し、新池は水鳥で賑わっています。実験がこれだけに止まらず、さらに発展していけるよう、皆さんの参加をお待ちしています。小雨決行。

52-15

市川Ⅱ期埋め立てをめぐるシンポジウム

日時： 10月16日(日) 午後1時～午後5時

場所： 行徳公民館

主催： 市川海研究会 連絡先 寺田



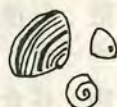
第1部 市川Ⅱ期埋め立ての問題点を探る 午後1時～3時

講師： 東 良一 (行徳野鳥観察舎友の会)

小笠尾精一 (三番瀬研究会)

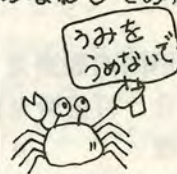
風呂田利夫 (東邦大学講師・海洋生物学)

ショート・ケビン (海洋民族学)、他



市川Ⅱ期埋め立てが東京湾漁業・鳥類などに与える影響、また、海洋生物学・民族学・海洋土木などの見地から見たいろいろな問題点等を、様々な分野の方々に語っていただき、市川Ⅱ期埋め立ての持つ問題点をあらためて見つめなおしてみたいと思います。

第2部 パネルディスカッション "COVER THE WATERFRONT" 午後3時～5時



私達が本当に求めるべき親水空間とはどんなものか、埋め立てを行わずに東京湾ウォーターフロントを造り出すにはどのような方法があるか、……などを文字通りあらゆる角度から話し合いたいと思います。ふるってご参加下さい。

新入会員

編集後記

夜の虫のうたがにぎやかになりました。冬鳥のカモたちも日ごとにふえています。もう秋です。二学期も始まります。夏休みのレポートをまだ全然書き終えていない僕を尻目に、季節はどんどん移り変わっていきます。困ったものだ、まったく。(D)
ススキとオギの見分けがつくようになってから、秋の野原がいっそう好きになりました。ふわふわしたやわらかそうなオギの穂、荻という字の感じがわかりそう。(純)
バンディングについての賛否を論ずるのはとても難しいことです。ただ個人的には鳥を掴まえるということ自体に私はとても耐えられそうにありません。(馨)

すずがも通信 No. 52

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

発行人 東 良一

事務局

編集 清水大悟・蓮尾純子・東 馨子

行徳野鳥観察舎

1988年10月1日発行

年会費 一般1000円、ジュニア500円